
東京に咲く花

もち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京に咲く花

【Nコード】

N8301P

【作者名】

もっち

【あらすじ】

1人の男が無垢な少女と出会う

（前書き）

これを読んであなたの明日への希望になれば幸いです

バイパスにかかる歩道橋から溜め息がもれる。

「俺も年とったなあ…」

7才違いの妹はもう高校生。

11才違いの弟はもう中学生。

そりゃ年とるわけだわ。

なんて感傷に浸ってる暇はないもので…。わかってる、わかってるんだけど、それでも最近はいい弱音も吐いてみたりする。そしてタバコに火をつけてまた歩き出す。

桜並木の通りを2本目の角に曲がると行きつけのカフェがある。綺麗なお姉さんが看板のちよつとこ洒落た店だ。いつものカフェラテを頼んでまた一本タバコに火をつける。

優雅な休日…。とまでは言わないが少し安らげる空間だ。

最近はこの空間のためだけに生きてると言っても過言じゃない。いや、それはさすがに言い過ぎか…？

カフェラテを飲み終わる頃にはもう日が暮れていた。最後のタバコの火を消して僕は家路につく。

ふとあの頃を思い出した。あれはまだ僕が中学生だった頃だ。あの頃は世界が自分を中心に回っていると本気で思っていた。友達、恋人、テレビ、セックス、漫画、映画…。あの頃の僕はひとりぼっちじゃなかった。とても充実してた。今の生活も充実してないわけではないがあの頃のような充足感はない。このまま家に帰ればまたつまらない明日が待ってるのかも…。

そうこうしてるうちに家に着いた。

簡単な晩ご飯を作り胃を満たす。寝る前に少しパソコンをいじって寝る。

最近夢の中でさえ何かに追われるようになった。もうウンザリだ。日が変わり、やがてゆっくりと明ける後ろめたい太陽の眩しさで目

を覚ます。

今日は仕事を休もう。たまのワガママくらい聞いてくれるだろう。会社に電話をして僕は風邪を患った。

さて、不意におとずれた貴重な休日は何をしようか、考えながら着替える。

今日はちよつと遠くまで行こう。

なんの目的もない。ただ漠然と遠くまで行ってみたかった。

久しぶりのオートバイ、スロットルを回す。

カーラジオもない愛車。僕のお気に入り。代わりに僕が鼻歌を歌ってた。

環状線をただまっすぐ走らせた。ただひたすらまっすぐに。

途中コンビニで弁当とコーヒーを買って近くの小さな公園で食事を済ました。

公園には何人か子供がいてそれを見ながらタバコを吸っていた。

すると一人の少女がこちらへ駆け寄ってきた。

「どうしておじさんはこんなところでご飯食べてるの？」

少女の一言にいろんな意味でグサツときた。

一つは平日の真つ昼間からこんなところにいる自分への後悔。

一つはおじさんと呼ばれたこと…（これにはかなりグサツときた）

「おじさんも遊ぼう」

少女は僕の腕を掴み砂場へと導いた。少女の純粹で無垢な笑顔を見ているとおじさんと呼ばれたことも許せるような気がした。

砂場には砂で出来たお団子がいくつか並んでいた。

「はい、おじさんの分ね」

砂場には3人の女の子がいた。僕を誘った女の子が他のみんなにお団子をわけていた。みな一様に食べるマネをして遊んでいたので僕も食べるマネをした。

「おいしい？」

と言う少女の顔はおいしいと言ってほしくてたまらなさそうだったので僕も美味しいよと答えた。

少女の可愛らしい笑顔は周りにも笑顔をもたらしした。僕もその一人になっていた。

そうしていくら時間が経ったんだろう。時計の短針が90度傾くくらいになると辺りには夕日が差していた。

「あたしも帰るう」

「じゃああたしも」

一人ずつ順番に帰路についた。砂場には最初に僕を誘った女の子だけが残った。

「君はまだ帰らないのかい？」

と声をかけると少女は

「まだママが帰ってきてないの、だからもう少しいるの…」

少女は少しだけ寂しげな顔を見せた。

「もう少し遊んでいようか」

と言つと

「うん」

とまた無垢な笑顔を見せてくれた。

少女は小さなバケツに水をなみなみと汲んできては必死に泥団子を作っていた。一つ一つ丁寧に作られていく泥団子には少女の喜びや寂しさがいっぱい込められているような気がした。

「はい、どうぞ」

僕の中に少しずつ小さな感情が芽生え始めてきた。やがてそれは大きな感情になって押し寄せる。

「おじさんどうしたの？」

気がつけば僕は涙を流していた。

「おいしくなかった…？どつか痛いの…？」

僕は小さく首を振り泥団子を食べるマネをした。

「すごく美味しいよ……」

この年になって人前で涙を流すなんてどうかしてたのかもしれない。

「おいしい？よかったあ」

世界が自分を中心に回ってたあの頃をまた思い出した。こんな幼氣

な表情をしてた頃が僕にもあつたんだ。それは今思えばちやちな幻想だったのかもしれない。この少女もいつか“そう”思う時が来るのかも知れない。でも僕にもこの少女にも些細でも歴史を持つていたことが大事なんだって思うとまた少し涙が溢れた。

「じゃああたし帰るね♪」

少女の言葉でハッと我に帰ると少女はもう背中を見せていた。僕は溢れる涙を袖で拭いベンチで深呼吸して空を仰いだ。夕闇がこんなに美しいと思ったのは初めてじゃなかるうか。僕は愛車にキーを差し2、3回スロットルを回した。もう二度と会うことは無いであろうあの少女に別れを告げて……

次の日、昨日の突発欠勤のことを怒られた。そりゃあそうだ。一応一社会人だからな……

仕事も終わり、バイパスにかかる歩道橋から溜め息がもれる。

「ふう……」

またいつものカフェで一服していこうか。

この街に大切な場所がある。この街に大切な人がいる。それだけで僕はまたもう少しだけ頑張ってみようかなって思える。まだ誰も知らない明日へ、今日を積み重ねた明日へ

（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます

これからもつたないながらも頑張って執筆していくのでどうか応援
よろしくおねがいします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8301p/>

東京に咲く花

2011年1月4日02時22分発行